

水の源

MIZU NO MINAMOTO



水源の里の 後継者たち

新潟県関川村 「大したもん蛇まつり」

開催日: 8月27日、28日

昭和42年に発生した羽越大水害と村に伝わる大蛇伝説をテーマに行われている夏まつり。ギネスブック認定の竹と藁で作る世界一長い蛇（長さ82.8m、重さ2t）を約500人が担いで村内を練り歩く。

ウォークルポ

— 集落を継ぐ

水源の里を未来につなぐ
地域おこし協力隊

奈良県川上村

— 伝統を継ぐ

“呼吸する和紙”で
新時代を切り開く
和紙デザイナー

愛媛県西予市



巻頭インタビュー 水源の里へ思いを馳せる

女性ならではの落語を確立したい

落語家 桂 三扇さん

聞き手:「水の源」編集長 町井且昌

女性ならではの落語を 確立したい

落語家 **桂 三扇** さん

——大阪市北区にある上方落語の定席「てんまてんじんはんじょう天満天神繁昌亭」は賑わっているようですね。三扇さんのホームグラウンドはここですね。

そうです。2006年に開館した、上方落語唯一の寄席小屋です。

——上方落語振興の功績や話題性を評価され、一昨年に第8回繁昌亭大賞創作賞を受賞されました。

ありがとうございます。

——落語の世界に入られたきっかけは？

高校に通っていたとき、落語の好きな世界史の先生

がおられて、いつも授業の前に落語の話をしてみんなを笑わせるんです。それがとても面白い。ちょっと教室をほぐしてから本題に入っていく。そんな素地があって大学でサークルを決めるときに「落語研究会」が目についたんです。



——“オチケン”ですね。

そう、オチケン。友だちに「見学に行かへん？」と誘われて覗いてみたら面白そう。「女の子は三味線だけ弾いていればいいねん」ということだったので、気楽に入部しました。でも実はそれがダメシで（笑）。3、4か月も経つと「落語やらんとアカンで」と……。なら、やらんとしょうがない。成り行きなんです。

そのころ桂三枝（現在の六代・桂文枝）師匠の事務所でアルバイトをしていたのですが、あるとき女性のマネージャーさんから「落語好きやったら弟子入りしてみたら？ あかんかったら事務員に戻ってもいいし」と声をかけていただいて入門。また軽い気持ちで（笑）。

——上方では3人目の女性落語家ですね。

露の都さん、桂あやめさん、そして私。お二人とも今も現役です。先輩の高座を見て「私も何とかやれるかな」と簡単に思って入門したのですが、後で苦労しました。先輩たちは才能と大変な努力であそこまでやれたんだとつくづく思います。

——三扇さんに続く女性落語家は？

入っても修業中に辞めてしまうので、私の後は10年以上間が空いています。しかし、10年程前に放送されたテレビドラマの影響で落語人気が高まり、今では上方の女性落語家は18人にまで増えました。

Profile 桂 三扇さん

1970年京都府福知山市生まれ。甲南女子大学在学中、桂三枝に入門し、門下唯一の女弟子となった。大阪で活動していたが、結婚を機に拠点を故郷である福知山市に移す。地域の寄席、司会、講演、落語教室など京都府北部を中心に活躍している。



演目によっては男性にしかできないものもありますので、師に伺いを立てて、女性にも演じられるようにアレンジした演目を作っています。若い世代に受け継いでもらえるように。古典の演目でも女性のやり方を確立していきたいと思っています。

——子ども向けの落語教室も開いておられますね。

はい。子どもの頃から落語に親しんでほしいと思っています。大人になってから寄席に行こうって思ってくれるかなと。「ファンの後継」ですね。

——子ども用の演目というのはあるんですか？

特にはありません。子どもさんが聞いて面白いな、楽しいなというものを選んでいきます。覚えるのが早くて感心しますよ。高座に上がるだけでも拍手喝采。可愛いですからね。

でも、高学年になると可愛いだけでは済ませず、技術的なことも覚えてもらいます。段々と度胸がついてきて、高座でも堂々と話せるようになります。

——それが目的で落語を習わせる親御さんもおられるでしょうね。

そうですね。私の教室でも高座に子どもが出ると受けるんです。お客さんは大喜びで見ているのですが、ご両親とおばあちゃんがオイオイと泣き出されたことがありました。「引込み思案だった子が堂々と舞台を務めた——」と。嬉しかったんでしょうね。そんな様子を見ていると、教えていて良かったなあと思つづくと思います。落語をやったことがある親はそう多くないですよ。自分ができないことを子どもが立派にやり遂げる姿には、感慨深いものがあるんだと思います。

——地方公演もありますか？

もちろん。年配の方に聞いていただくことも少なくありません。そういうお客さまには夫婦ものなんかを受けますね。ご自分の長い人生を重ね合わせて聞かれるからいっそう楽しみが増すんじゃないでしょうか。

——落語の楽しみはそんなところにもあるんでしょう。繁昌亭がますます繁昌することを期待しています。

横堀寛人さん



神保大樹さん



平井健太さん

集落を継ぐ

水源の里を未来につなぐ 地域おこし協力隊

かわかみ
奈良県 川上村

【取材・文：白波瀬聡美】



現存する日本最古の人工林「歴史の証人」

過疎地の救世主現る!?

緑陰をわたる風を感じながら、樹齢400年ともいわれる吉野杉を見上げる。現存する日本最古の人工林は「歴史の証人」と呼ばれる村の誇り。整然と植えられた杉林はその手入れのおかげで、樽や建具となる際に節が少なく年輪の詰まった良材になるそうだ。川上村の財に迎えられるながら、村役場の松本勝典さん、嶋田宏也さんの案内で農家民宿「暮らしの宿HANARE」へと向う。

集まってくださったのは、川上村の地域おこし協力隊・通称「かわかもん」の3人。「地域おこし協力隊」とは、総務省の財政支援を受けて『都市地域から過疎地域等の条件不利地域に住民票を異動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体

が隊員として委嘱。一定期間、地域に居住して、地域おこしの支援や、農林水産業への従事、住民の生活支援などの「地域協力活動」を行いながら、その地域への定住・定着を図る取り組み』で、活動期間は1年以上3年以下と定められる制度。近年特にその活用促進には国を挙げて注力され、平成26年度には444団体1,511人だった隊員数が、27年度には673団体2,625人と千人以上の増加を遂げている。さらに28年度には、協力隊の研修費等への財政支援も行い、3,000人を目標とする拡充に向け活用を促している。今回は、要請の高まる地域おこし協力隊が人口減少や高齢化に悩む水源の里の「後継ぎ(後継者)になれるか」というテーマのもと、実際に活動している隊員と受け入れ側の自治体職員の方々に、座談会形式で話を伺った。

かわかもんの活動実績

地域おこし協力隊の受け入れを始めて4年目となる川上村では、開始から27年度までに延べ11人を採用。「かわかもん」たちは、地域の自然や産業を活かした独自性のある活動で村の魅力づくりに取り組み、制度活用の先進地として全国から注目を集めている。

新潟県出身の神保大樹さん(24歳)は隊員歴3年目。村民が自家用に作った野菜の余剰を村内に流通

させる「やまいき市」を主催している。「協力隊が各家を回り、消費しきれない野菜を集めて青空市で販売しています。そこから派生して、川上村を水源とする吉野川流域の海産物や果物も仕入れて商品の充実にも努めています。今も魚の行商から帰ってきたとこなんです」。穏やかな口調でアクティブな活動を語る。

横堀寛人さん(34歳)は岐阜県出身。隊員歴2年目にして、本日お邪魔している農家民宿「暮らしの宿HANARE」のオーナー。「もともとは知り合いが川上村の協力隊で、この宿を手掛けていまして。その手伝いを頼まれて何度か来ていたうち、なんかかやで知り合いと結婚することになりまして……今は一緒に宿を運営しています」。照れくさそうに相手を崩す。先日お子さんも誕生したそうだ。微笑ましいエピソードで一気に見え

この4月に着任したばかりという平井健太さん(32歳)は静岡県出身の家具職人。飛騨高山やアイルランドで学んだ木材加工の技術を生かした施業をするため、吉野林業で名高い川上村へやってきたという。「まだ具体的な活動と言えないことはないんですけど、吉野の杉や檜を使ってここで独立起業したいと思っています」。言葉の端々から、明確なビジョンとその実現への強い思いが垣間見える。



「暮らしの宿HANARE」で地域の皆さんとピザパーティ



隊員が企画した川上村エコツアー

さまざまな地域からやって来た隊員たちが、数ある受け入れ自治体の中から川上村を選んだ理由はなんだったのか。

川上村だからできること

川上村の隊員募集要項を見ると、例えば「養魚場で渓流魚を育てて販売」とか「オートキャンプ場のスペシャル管理人」など、業務内容が詳細に記載され、来て欲しい人材が明確だ。なるほど。これだと安心感があるし、協力隊、受け入れ自治体双方に思いの相違が生じにくく、応募を後押ししやすからうと勝手に想像していたが、皆さんに尋ねると「そんな要項はほとんど見ていない(笑)」とのことだった。受入担当の松本さんも「具体的な内容を明示したほうが応募者が集まりやすいとの話もあり、このような募集要項にしているが、実際にはその業務に固執はしていません」と苦笑する。

では、協力隊の募集に苦心する自治体と川上村の違いはなんなのか。松本さんは、「何が良くて何が悪いのか正直わかってはいないのですが、うちではとにかく活動の自由度が高いです。なので面接時にもまず、「ここで何がしたいか、



「やまいき市」の生産者と

を応募者に提案してもらいます。そのうえで、こちらができるサポートをしていく。細かい指示をしないので、目的意識がないと居づらいし、続かないとは思いますが、その分やらされ感のない、中身の濃い活動に繋がっているのではないかと思います」と言う。むろん自由とはいえ、ただ放任しているわけではなく、担当者との密な「ほうれんそう(報告・連絡・相談)」に基づく細やかなサポート体制に裏打ちされている。加えて協力隊同士の繋がりも深く、お互いに切磋琢磨しながら、林業振興や民宿経営、ツアー企画など、ここでしか実現できないオンリーワン事業への高い目的意識を持って活動を展開。確かに、役場のお手伝いな



川上村産野菜を販売する「やまいき市」



「暮らしの宿HANARE」お披露目会

感覚で来ている者は一人もいない。それはすなわち、任期を終える3年後の将来設計にもかかわってくる。

任期の先を見据えて

村が望む地域おこし協力隊制度の最終到達目標は「地域への定住・定着」。現在、全国平均で約6割の隊員が、任期終了後も同じ地域に定住しているという。3人に将来の展望、そして任期後も川上村に留まるつもりがあるかどうかを尋ねてみた。

神保「川上村へ来て一から自分の仕事を作らなきゃいけない状況に身を置くことで、自分の甘さや足りないスキルに気づくことができ、今後の生業や生き方について、真剣に考えるようになりました。ここに定住するかどうかはまだ分かりませんが、今後も引き続き食という分野から林業にアプローチして、吉野ならではの「木桶を使った発酵食品(野菜の漬物や味噌など)、の開発を進めていくつもりです」。

横堀「ここではとにかく、やる事が多くて忙しい。日々、生きていることを実感しています。今



座談会の様子



取材にご協力いただいた地域おこし協力隊(3名)と役場職員や地元の皆さんで記念写真

後もここで家族とともに、民宿経営を中心に、経験のあるデザインの仕事を活かしたり、樽づくりなどの地場産業も受け継ぎながら、村の魅力を多くの人に伝えたい」。

平井「川上村には「吉野杉工房」という木工センターがあり、熟練の木工職人も身近にいて、僕のやりたい事業に適した環境が揃っている。日本ではまだ杉や檜などの針葉樹で家具を手掛けている作家は少ないので、ビジネスチャンスも大いに感じています。出て行けと言われて限りは、ここで生活していく覚悟で来ています(笑)」。

三者三様のライフスタイルながら、この先も村の自然や産業を守り、つないでいきたいという熱い思いが伝わってきた。

後継ぎの新たな可能性

協力隊の皆さんの話を聞き、改めて地域おこし協力隊が水源の里の後継ぎとなれるかについて考える。受け入れについて、「川上村民である私にとっては、彼らが3年後も残ってくれるかどうかは一大事。もちろん、ずっと村にいて欲しいけれど、隊員によってはここを離れなければならない事情が出てくることもあると思う。そんな時に、周囲から批判されたり、言い出せない環境ではいけない。だから最初から定住を条件に突きつけるのではなく、任期中をできるだけ居心地のいい形にもっていくことが、僕らの仕事だと思っています。3年

持たなきゃ、4年目があるはずないですから」という松本さんの言葉が印象深く心に残る。

川上村では、地域おこし協力隊の受け入れをはじめて以降、ヨソモノに対して排他的だった集落の意識が目に見えて変わってきたようだ。取材終盤、協力隊1期生でもある横堀夫人の美穂さんが10日前に生まれたというご長男を連れて来てくれた。と同時に、入れ替わり立ち替わりご近所さんがやって来て、嬉しそうに赤ちゃんに目を細める。地域が結んだ新たな命と、それを村の宝物のように愛おしむ村民をみて、地域おこし協力隊はすでに水源の里の大事な担い手(後継ぎ)であり、未来を照らす希望の光になっていると感じた。

川上村はこんなまち



人口1,320人、面積269.2km²。奈良県東南部、大峯山脈と台高山脈の間にあり、大台ヶ原山の北西側に位置する。吉野川(紀の川)の源流であるとともに、大滝・大迫ダム湖を抱える水源地の村。下流域の人々とともに「かけがえのない水と森と山を育てていきたい」という想いのもと、平成8年に全国に向けて「川上宣言」を発信し、環境保全活動に力を注ぐ。急峻な地形は雄大な渓谷美や大小さまざまな滝を生み、石灰岩質の地質は神秘的な鍾乳洞となって村内に点在している。また現存する日本最古の人工林を育む吉野林業は、村を代表する産業として名高い。名物は、柿の葉寿司、火打餅、きりこ(塩味のおかき)、こんにゃく、そうめんなど。



伝統を継ぐ

“呼吸する和紙”で 新時代を切り開く 和紙デザイナー

愛媛県 ^{せいよ}西予市

【取材・文：永井 晃】



和紙デザイナー
さとう ゆかり
佐藤友佳理 さん

Profile

高知県高知市生まれ。小学校から大洲和紙の産地である愛媛県内子町に暮らし、和紙が身近にある環境で育つ。ロンドンでモデルとして活動後、桑沢デザイン研究所で学ぶ。2012年より愛媛県西予市にアトリエを構え、「呼吸する和紙」を発表するなど、伝統ある手漉き和紙の世界に新しい風を吹き込んでいる。



佐藤さんの代表作「呼吸する和紙」 伝統技術と新しい手法が融合したモダンな印象の作品

取材は出会いの場

取材は毎回楽しい出会いの場だ。水源の里でいきいきと暮らす人。集落を全国区に育て上げた仕掛人。愚直に伝統を守り抜く人などなど。魅力的で素敵なお人との出会いは、筆者が勇気や元気をいただく機会でもある。今回は、東京やイギリスでモデルとして活躍し、和紙職人に転身したという経歴の持ち主、佐藤友佳理さんを訪ね愛媛県西予市に向かう。どんな「一期一会」が待っているのか。元モデルと聞き、いつもよりテンションが上がりがちなのを男性読者には理解してもらえることだろう。

右往左往の末に

満席のANA1633便は、松山空港に定刻10時に舞い降りた。山々の緑や頬をなでる風は、もう初夏の気配。レンタカーの窓を全開にし、一路西予市を目指す。インター近くの『どんぶり館』で腹ごしらえ。館内は平日にもかかわらず大変な賑わいだ。取材に向かうためナビで目的地を設定。ところが、電話番号を入力しても住所を入力しても目的地を表示しない。佐藤さんはいったいどんなところに住んでいるのか？ 小さな不安が芽生える。どんぶり館に舞い戻り地元の方らしい店員さんに「明間あかんまの佐藤友佳理さんを訪ねたいのです

が……」と問う。「ああ、佐藤さんね」。彼にとってはよくある質問のようだ。店員さんは接客の手を止めてわざわざ地図を書いてくれた。だが、行けども行けども目印の橋は現れない。Uターンするか……と思いついたとき、大きな赤い橋が目前に現れた。しばらく進むと大洲方面の看板が出現。正しいのか間違っているのかわからない。道を尋ねたくても水源の里では容易に人には出会わない。田んぼにトラクターで作業する人を発見。「明間へ行きたいのですが」と大声で尋ねる。「赤い橋まで戻って、西予方面へ行け」親切に怒鳴り返された。多くの人の手を煩わせて、ようやく10分遅れで到着した佐藤

家。その佇まいは純和風。陽の光に輝く屋根瓦がきらきらと美しい。玄関から声を掛けると長身の飾らない女性が現れた。一輪挿しの野花のような美しい立ち姿だった。

漫画家からモデル志願に

子どものころから絵を描くことが大好きで将来は漫画家志望だった友佳理さん。同時に、育った内子町では和紙と出会っていた。小学校の卒業証書は自分で漉いたものだったし、和紙で作った凧で競う『凧合戦』にも毎年参加、近所には手漉き和紙工場もあり、彼女の身の回りは和紙で溢れていた。だが、当時の彼女は「和紙に係わ



る仕事に就く」というイメージがわかなかった。ドラマチックな転機は高校時代に訪れる。「ラフォーレ松山」というイベントの地元モデルに応募。見事栄冠を手にする。ステージでは東京で活躍するモデルさんたちと肩を並べてスポットライトも浴びた。絵を描くこと。英語を磨くこと。モデルになること。この3つの進路の狭間で心は揺れる。絵を描くことは、「ご飯を食べられる可能性が低すぎる職業」という母親の一喝にあえなく断念。モデルになることを内心に秘めながら英語を学ぶため東京の専門学校に進学した。専門学校に通う傍らモデルへの夢を実現するため事務所廻りに励んだ友佳理さん。「本気なら、まず5キロ痩せてから」と言われ1か月半で5キロのダイエットに挑戦。過酷なダイエットの見返りに体調不良に陥ってしまう。彼女が経験した初めての挫折だった。

しかし、1つの夢が潰えたからとて意気消沈する性格ではない。英語の習得というもう1つの夢を求めて、単身ロンドンに飛ぶ。本場

で英語を学びながらメイクアップアーティストの養成学校に在籍。モデルオーディションにも再挑戦。日本人モデルが希少価値という事情も相まって、コスモポリタンをはじめとするファッション雑誌やテレビなど、一躍売れっ子モデルになった。成功を手中に収めつつあったが、ビザ更新のため帰国を余儀なくされる。ロンドンでの成功を背景に東京でのモデル再開の道を模索する。しかし、東京マーケットで活躍できる年齢は若い。25歳を過ぎた彼女を迎え入れる舞台は極めて狭いものだった。ビザを取得してロンドンに戻る選択肢も……。実際、ロンドンの事務所はその決断に期待を寄せていた。友佳理さんは考え悩んだ。

そんな折、脳裏に浮かんだのはロンドン滞在中に気づいた「日本の文化の美しさ」だった。反面、それらの知識があまりにも乏しい自分に愕然としたこと。海外で活動するにしても、日本のことをもっと知ったうえでなければ意味がないとの考えに至る。もう一つ、

ファッションの華やかさの対極にあるモノづくりへの憧憬。幼いころから絵を描くことが大好きだった。あの夢が夏空に湧き立つ入道雲のように彼女の胸に広がった。進むべき道は日本でのモノづくりに固まった。

和紙でビジネスモデルを

方向が決まればすぐに行動。桑沢デザイン研究所に所属し、2年間デザインを学ぶ。2年生のとき父親が経営する建設会社と愛媛県産業技術研究所が建築向け和紙を共同開発することに。子どものころなじみ深かった和紙復興のお手伝いができればとプロジェクトに参加する。和紙の原料「楮」にゼオライトという鉱物を混ぜる新しい手法で生み出した和紙は、別名「呼吸する和紙」。これを使った女性向け商品の開発を任された。東京元麻布での展示会で作品を見た外国人が購入を申し出たり、今を時めく建築家、隈研吾氏や内田繁氏にも認められたりした。よしと

ばかり、和紙づくりに専念するためふるさと内子町への帰省を決断。和紙と共に生きる現在の生活がスタートした瞬間だった。

伝統と聞くと頑なで普遍的なイメージを抱く。しかし彼女は「伝統と革新を意識しながら紙を漉いています」と言う。以前観たテレビ番組で、300年以上続く老舗がどうして長く商いを続けてこられたか問われたときの答えと同じだ。「不易流行」という言葉があるが、伝統の世界こそこれの繰り返し。一か所に留まり続けていては、顧客のニーズや時代の変化との間に乖離を生じ、結局世間に受け入れられない「モノ」になってしまう。不易の部分を理解し大切にしながらも、時代の流れや顧客のニーズに敏感に対応していく。物事が継続されていく上で実は最も大切な考え方なのかもしれない。さらに、和紙の世界で自身の立ち位置を「広告塔」と評する。「私の作品が世に出て話題を作ることで、和紙の世界が多くの人に知っていただければ、それはそれで意味がある」と

割り切りも潔い。

東京やロンドンで生活してきた体験が和紙づくりにも生かされている。東京は「消費するシステムが異常に発達した街」。そこではスピードと量こそが重要だが、その価値観に危うさを感じた。一方ロンドンの生活から学んだことは、堅牢だが冷たい石の文化。対する日本は木の文化。繊細で脆いが温かい。儂い文化だが世界で必ず通用すると確信する。一つのエリアで認められるものは、世界という大きな場所でも評価が得られる。ロットは小さくても時間をかけ、丹精を込めて作ったモノへの価値は万国共通。小ロットでも経営的に成り立つビジネスモデルを確立したいと力を込めた。

「男前な生き方」を貫く

3人姉妹の末っ子として生を受けた友佳理さん。子どもの時から比較的自由に育てられてきたと自身の幼少期を振り返る。東京への進学に始まり、モデル志願やロンド

ンへの留学。すべて自分で道を開き、決断し、実行してきた。その時々親の反応は？ と尋ねると「あなたが決めたことだから」と。彼女のご両親は、子どもの最大の応援団に徹してこられたようだ。しかし、自由の裏返しには責任がある。最近失われつつある大人としてのあるべき姿が彼女には確立されていた。自身を頑固者と自覚した上で「後悔はしたくない。これからも自分を信じて、生きていきます」。その決意と覚悟の潔さ。女性ながら『男前な生き方』を貫く友佳理さん。筆者の住む綾部市で創業した郡是製糸の社訓に『良い人こそが良い糸を紡ぐ』というものがある。彼女も幾多の経験を積み苦難を乗り越えて磨かれたからこそ、新しい時代を切り開く新しい和紙を漉く人材になり得たのだ。全国の和紙製造の現場は苦境にある。課題は高齢化と後継者不足だ。「伝統と革新」。その彼女の考えの中に、苦境にある和紙漉きが生き残るためのヒントが隠されているような気がする。



和紙のこよりを編むことで、レースのような作品ができあがる



制作中の「手漉き和紙のボール」

西予市はこんなまち

人口40,157人、面積514.34km²。市域は東西に長く広がり、多彩な文化・自然環境を有する。シルル紀（約4億2500万年前）のサンゴや三葉虫の化石が発見されている地層（黒瀬川構造帯）などからなる「四国西予ジオパーク」は、日本列島の成り立ちを知ることができる貴重な自然遺産だ。2016年2月、古くから光沢の美しさなど品質の高さに定評のある伊予生糸が、地域独自の生産方法による農林水産物などを国が評価・保護する「地理的表示保護制度（GI）」に登録された。日本初の女性産科医・楠本イネが医学を学んだ地でもある。



京都府綾部市

山崎 善也 市長

田園回帰への 確かな潮流

「水源の里」、挑戦の始まり

「今が一番、しあわせ!」そう呟く綾部市水源の里連絡協議会会長の酒井聖義氏（88）の言葉が語る意味は重い。10年前、このままでは村の存続さえ危ぶまれる中で、「それでも出来ることから始めよう」と酒井氏は集落再生に踏み出した。綾部市はまず5年間、氏の住む地域など5つの集落で試行的に様々な取組を積み重ね、その後5年間でさらに対象地域を広げ、現在は14の集落で後述する「水源の里」再生プロジェクトに取り組んでいる。

綾部市は京都北部の玄関口に位置し由良川が貫流する山紫水明の地。かつて54千人の人口は34千人になり、200近くある集落の約3割が高齢化率50%を超える状況。このままでは“消滅可能性”もあるという「限界集落」を、その多くが由良川上流・支流域に存することから将来への希望を込めて「水源の里」と称し、その再生策を全国初の条例化で打ち出した。基本理念に「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」を掲げたが、その趣旨は疲弊する農山村だけの課題として捉えず、川で繋がる流域の都市住民にも理解と一定の負担を求める

ことにある。結果的に今の地方創生や森林環境税の考え方を先取りしていたともいえよう。

「小さな」を積み重ねる

酒井氏が住む大唐内集落は、最初の対象5集落の一つで、昭和40年には88人あった人口が28人にまで減少し、しかも高齢化率は63%。自分たちが村の最後の住民になるかもしれないという複雑な思いが誰もの心の奥に募り、色濃い閉塞感が漂っていたのは事実。

そこに導入された主な取組は、特産品開発、都市農村交流、定住促進などで、行政も定住支援住宅や光ケーブルの新設、携帯電話の不感知解消など生活基盤の整備で支援した。栃の実などの地域資源を活用した住民による特産品の製造販売、都市部の学生を招いての各種ボランティアなど、徐々に活動の幅を広げ、全市挙げての定住促進がマスコミにも注目され始めた。身の丈に合った一歩を踏み出すことで「小さな実験」が始まり、試行錯誤の中から「小さな成功」が生まれ、それが「小さな雇用」「小さな経済」として循環し始めた。そして地域と行政、民間事業者との連携の中から新たな定住者にも



繋がるなど、「小さな」積み重ねが大きな実を結びつつある。

しかしながら当初から村全体の動きになっていたわけではない。「せめて10年若かったなら…」「もう無理、自分の代で終わる」といった声も飛び交った。都会から戻ろうとする息子に「帰ってこなくていい」と慮ったことを悔やむ翁の述懐はとりわけ重苦しい。何よりも大切なのは“おらが村”への誇り。その矜持を失ったふるさとの再生は難しい。

集落再生の先へ

「田園回帰」が大きな潮流となってきた。「半農半X」や「里山資本主義」といった新語も生まれた。価値観の変化や多様化が起きているのである。都会が豊かで幸せになれる舞台という画一的な「都市神話」は崩壊し、自己探求のフロンティアを田舎暮らしに求める若者が増えている。振り返ると住民への広がり強く意識した10年であったが、気が付けばこの思いは内外の次の世代へ確実に引き継がれようとしている。そんな世情も映して、冒頭酒井氏の感慨が胸を打つ。



酒井聖義さん。御年88歳とは思えないほど生き生きとされている。



特産の「とち餅」。栃の実を贅沢に使っており、全国から注文が来るほど。



田植えボランティアでの1枚。貴重な手植え体験に、都市部からお越しいただく方も多い。



“香り・うま味・食感”三拍子揃った絶品焼豚

炭火烧豚 1,200円 (280g)



岐阜県八百津町

面積128.8km²、人口11,534人。ユダヤ人難民約6,000人の命を救った外交官・杉原千畝生誕の地。昨年の3月、当時の貴重な資料等を収めた記念館がリニューアルオープンしたばかり。名産品は、茶巾絞りで栗の形を模した「栗きんとん」。町内4店舗の和菓子店がその味を競っている。

肉の御嵩屋

所 岐阜県加茂郡八百津町八百津3792-8
 Tel 0574-43-0150
 営 8:00~19:00
 休 月曜
<https://mitakeya.com/>



昭和元年創業の精肉店「御嵩屋」が作る「炭火烧豚」の原点は、3代目となる現在の店主・山田眞二さんのお母さんが手づくりしていた「煮豚」。当時から味の評判も上々だったというこの煮豚を、眞二さんが店を継いだ際、現在の形に改良したのが20年前のこと。さらに、5年程前に地元のテレビ番組で取り上げられて以降は町外にも広く知られ、お歳暮シーズンには売り切れるほどの人気商品となりました。

岐阜県産豚カタロース肉のほか、地元醸造所に特注した醤油、仕上げの炙りで使用する地元産のブナ・ナラの炭など、厳選素材で作られる出来たての味と香りを真空パック。賞味期限は冷蔵で45

日。地元の方が自信を持って手土産に選ぶ、八百津町自慢の品です。

切り分けた後に少し温めると、軽く箸を入れるだけでほぐれるやわらかさ。脂身のおいしさは肉質の良さをうかがわせます。見た目よりもあっさりとした繊細な味、炭火でほんのりと焦げた醤油の香りに誘われて、思わず「もう一切れ」と箸がのびてしまいます。煮ダレより少し甘めに仕上げた附属のタレも絶品で、一層ご飯が進みます。

大きさを整える過程で出る切れ端を角切りにした「炭火烧豚丼の素」は、「炭火烧豚」と同量で800円とお得。チャーハンやひつまぶし風にするなどのアレンジメニューもおすすめです。

読者プレゼント

炭火烧豚&炭火烧豚丼の素セット 1名様

●アンケート

- Q1. 面白かった・関心を持った記事
- Q2. 今後取り上げてほしい内容
- Q3. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

●プレゼント応募方法

はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、右記(P15)宛先『水の源33号』読者プレゼント係までご応募ください。

【平成28年7月29日(金)消印有効】

※ 当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。
 ※ ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用しません。



協議会だより

第8回全国水源の里フォトコンテスト作品募集

テーマ

水源の里の四季折々の自然風景、人々の生活や祭事、その地域を象徴する風物など、水源の里の魅力が表現された作品を募集します。

応募資格

プロ・アマ、年齢、性別、国籍を問いません。

撮影場所等

全国水源の里連絡協議会参画市町村において、平成25年8月以降に撮影したもの。



第7回グランプリ作品「僕らの居場所」

受付及び締切

平成28年6月1日から8月1日まで。最終日消印有効。

応募料

2点まで1,500円。3点目以降1点増えるごとに500円追加。

賞

- グランプリ(1人) ……賞金20万円
- 総務大臣賞(1人) ……賞金5万円
- 農林水産大臣賞(1人) ……賞金5万円
- 国土交通大臣賞(1人) ……賞金5万円
- 特選(10人) ……賞金1万円

審査員

- 田沼武能(一般社団法人日本写真著作権協会会長)
- 井上隆雄(公益社団法人日本写真家協会会員)
- ゲスト審査員 鷲田清一(哲学者、京都市立芸術大学学長)

応募・お問合わせ先

下記宛先「フォトコンテスト事務局」まで
 応募要項・過去の入賞作品は、協議会ホームページでも紹介しています。

<http://www.suigennosato.com/>

第9期総会開催

6月9日(木)、全国水源の里連絡協議会第9期総会を開催しました。第8期事業と決算を報告し、第9期事業計画と予算を決定しました。原案のとおり承認されましたので、報告します。また、役員体制は下記の通りです。

会長	京都府	綾部市	山崎善也
副会長	福島県	喜多方市	山口信也
	山梨県	甲州市	田辺篤
	岐阜県	揖斐川町	宗宮孝生
	島根県	津和野町	下森博之
	岡山県	真庭市	太田昇
	高知県	大豊町	岩崎憲郎
	大分県	佐伯市	西嶋泰義
監事	北海道	中川町	川口精雄
	和歌山県	田辺市	真砂充敏

(敬称略)

「地方創生勉強会」開催

6月9日(木)、NPO法人共存の森ネットワーク協会・澁澤寿一理事長を講師に迎え、勉強会を開催しました。当日の様子は次号に掲載します。

新たに6町村が参画

- 秋田県 東成瀬村(8期途中より)
- 北海道 新十津川町
- 北海道 豊浦町
- 静岡県 小山町
- 兵庫県 神河町
- 鳥取県 日野町

第10回全国水源の里シンポジウム開催日決定

開催日:平成28年10月26日(水)・27日(木)
 会場:京都府綾部市

本誌に関する
お問い合わせ、
ご連絡先は

▲全国水源の里連絡協議会 水の源編集委員会

綾部市役所 定住交流部 水源の里・地域振興課 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
 TEL:0773-42-4271 FAX:0773-54-0096 E-mail:suigen@city.ayabe.lg.jp
<http://www.suigennosato.com/index.htm>

定期購読のお知らせ

『水の源』が年4回お手元に届きます。年間購読料:1,000円(送料込)
 お申し込みは、上記の電話、ファックス、メール、HPから

